

ハイデガー『存在と時間』注解（2）

寺 邑 昭 信

承前

注解（2）は『存在と時間』第七節を対象とするが、この節は「根本的探究の現象学的方法」と題されており、存在の意味への接近方法とされる現象学の予備概念の解明が主題となっている。

ところで現象学といえば、普通我々の念頭に浮かぶのは、その創始者であり、ハイデガーの師でもあったフッサールの現象学である。フッサールは十九世紀末の実証科学による哲学的理性の危機、歴史主義による哲学の相対化、意識の物化に対抗して、あらゆる先入観を排除して、意識の明証性を武器に（成否は別として）哲学を再び諸学の揺るぎない基盤として再生させようと試みた。

数学から出発したフッサールは1901年の『論理学研究』において、論理法則も経験的事実の中に相対化してしまう心理学主義を批判し、意識の様々な作用の記述的分析を行ない、意識内容と意識作用を区別し、意識には事実を成り立たせている本質を直観する作用があること、したがって、それぞれの対象領域についてその本質を明らかにする本質学（領域存在論）が成り立つことを示した。さらに1913年の『イデーン I』では、意識特有の在り方（志向態）を、日常的態度をカッコに入れて意識をありのままに捉えるという超越論的還元の手法を用いて記述分析し、意識の本質が、意識に与えられる対象をまずもって意味として構成することにあることを明らかにする。そしてこの構成主観としての意識は、物が意識に与えられ認識可能となる根拠をなすものとして、それ自身は経験のレベルには属さずそれを越えている超越論的自我と呼ばれ、他のものが存在しなくてもこれだけは存在するものとして絶対性を与えられるのである。フッサールはこうした絶対的自我を土台にして、ふたたび厳密な学問としての哲学を構築しようとしたのである。

この第七節を、そうしたフッサールの現象学を念頭におきつつ読む読者は、大きな違和感を覚えることになるだろう。

『存在と時間』の各邦訳、およびハイデガー全集、その他の参考文献の略号は「注解（1）」に記したとおりであるが、あらたに全集17巻を加え GA17と略す。

GA17 Einführung in die phänomenologische Forschung 1994

第17巻『現象学的探究入門』 1923/24冬学期

またその他の追加文献については左の略号を用いる。

HWP: Historisches Wörterbuch der Philosophie, Basel/Stuttgart

例えば第一巻は HWP-Bd.1 と表記する。

HPD1: Friedrich-Wilhelm von Hermann, Hermeneutische Phänomenologie des Daseins Eine Erläuterung von „Sein und Zeit“ I „Einleitung: Die Exposition der Frage nach dem Sinn von Sein” 周知のように、これは『存在と時間』についての詳細な注解であるが、なにしろ原文のほぼ各行ごとに注釈が加えられていて、原書の40頁に対して頁数は404頁に及ぶボリュームとなっている。そのためか、いささか冗漫に感じられる箇所もあり、また著者の解釈に引きずられてしまうことは本意ではないので、参照は最小限に留めた。ただし原書中の引用文の出典の確認などに関しては裨益するところが大きいことを付記しておく。

なお前回と同様、ゴチックの部分は『存在と時間』の本文を、また例えば 027/23 という表記は原書の27頁（およそ）23行目を指す。本文における下線部は、原文での強調箇所である。

・ 027/23-027/27 「存在の意味に対する主導的な問いをかけることでもって、われわれの根本的探究は哲学一般の基礎的な問いのもとにある。この問いの取り扱い方は現象学的なそれである。このことでもってこの論述は、「立脚点」というものにも、「傾向」というものにも身を委ねるのではない。」

「立脚点」の原語は Standpunkt, 「傾向」の原語は Richtung（もともととは方向という意味であり、また学術における潮流、趨勢を表す）である。

[Standpunkt は岩波版では「立場」、ちくま版でも「立場」であり、Richtung は、中公版、岩波版、ちくま版のいずれも傾向と訳しているが、実存の動性の動きを表す Tendenz も傾向と訳されることが多いのでやや紛らわしい訳である。]

後の注で詳しく触れるように、現象学という言葉自体は18世紀の哲学者ランベルトの造語であり、その後様々な哲学者によって様々な意味合いで使用されてきたのであるが、フッサール自身は、以下の引用文に見られるように1901年に初めて『論理学研究』第二巻の中で「記述的心理学」の代わりに、あるいは従来の経験的心理学的記述と一線を画すために現象学という術語を用いた。

「ここで問題になるのは、歴史的に与えられている、なんらかの言語に関する経験的意味での文法学的究明ではなく、更に広範囲の客観的認識論の領域に属し、またこれと密接に関係して思考体験および認識体験の純粹現象学の領域にも属する、極めて普遍的な究明である。…この純粹現象学は本質直観によって直接的に把握される種々の本質と、純粹にそれらの本質にのみ基づく諸連関を、本質概念と法則的な本質言表とによって記述的に純粹に表現するのである。」(E.フッサール『論理学研究2』立松弘孝他訳10頁)

「純粹現象学は一特に思考作用と認識作用の現象学としてのそれは一独自の純粹かつ直観的な方法によって表象、判断、認識の諸体験を本質的普遍的に分析し記述するのであるが、心理学はこれら諸体験を経験的に、動物的な自然的現実の関連の中で生ずる、さまざまな種類のリアルな出来事と解して、それらを経験科学的に研究するのである。他方、現象学は純粹論理学の基本的諸概念やイデア的諸法則が<発生>する<諸源泉>を開明するのである。」(同書10頁以下)

「心理学という語がその従来の意味を保有しているとすれば、現象学は確かに記述的心理学ではない。現象学固有の<純粹>記述は一すなわち諸体験（たとえ自由想像の中で虚構された体験であれ）の類例的個別直観に基づいて行われた本質観取（Wesenserschauung）と、観取された本質の純粹概念における記述的固定（Fixierung）化は一経験的（自然科学的）記述ではなく、むしろそれはあらゆる経験的（自然主義的）統覚と措定の自然的遂行を排除するのである。」

(同書25頁)

この『論理学研究』は、熱烈な、しかも優れた才能をもつ若い共鳴者たちを見出し (Vgl. 立松弘孝編『フッサール 世界の思想家19』1976年11頁), その後の現象学的運動の端緒となったのであるが、すでに『論理学研究』の出版後の数年間、反心理学主義、反実証主義的傾向の強いゲッチンゲン現象学派、同系統に属するが具体的体験の分析を通しての存在論的傾向の強いミュンヘン現象学派などの学派が、そしてフッサール自身の超越論的主観性の現象学が、つまり「立場」あるいは「傾向」が形成されたのである。

しかしハイデガーは、ここでの現象学とは、そうした特定の主張、内実をもった哲学の流派ではないこと、あるいは既存の現象学の流派の教えを指すのではない、あるいはそうした立場に組みすることはしないとはっきり述べているのである。(「正統派の現象学とか学派の義務といったようなものは存在しないと述べることは、おそらく些末なことではあるまい。決定的なのは、真正の探求する仕事であって、素人芸的な仕事ではない。」(GA58/17) 参照。)

このような既存の学説によるバイアスや先入見に予防線を敷く非受容的な態度、考察の源泉をひたすら観察される事実に求めようとする姿勢は、経験主義者としてのアリストテレスの姿勢を範として、とりわけカント以降のドイツ観念論を墮落、衰弱として拒否したブレンターノにも見られるし、また、こうした姿勢はなによりも「認識論的探究の無前提性の原理」(『論理学研究』第二巻第七節の表題) に立つフッサールの学問的態度において明白に確認できるものである。ちなみにこれらカッコつきの「立場」と「傾向」という語について、フォン・ヘルマン (HPD1 S.283) は、『イデー I』におけるフッサール自身の次のような発言を指摘している。

「経験主義者たちは、まぎれもなく一つの立場に固執している哲学者たちであり Standpunktsphilosophen…これと違って、われわれは、あらゆる立場以前 vor allen Standpunkten にあるものから、出発するものである。すなわち、一切の理論化的思考そのものがまだ開始する以前に直観的に与えられているものから、出発するわけであって—このときひとは、まさに、先入見などには眩惑さ

れずに、だから、真正の所与の全部門を注視することを妨げられないのである。」(E.フッサール『イデーン I-I』渡邊二郎訳108頁。省略およびドイツ語の挿入は筆者による。)

「われわれは、それらの区別(=直観のうちでわれわれに直接与えられている諸区別…筆者注)を、それらがそこでおのれを与えてくるとおりのまさに正確なありさまにおいて、受け取ったのであり、その際に、一切の仮説的もしくは解釈的解明抜きで、そうしたのであり、古代および近代の伝来の諸理論によってわれわれに暗示されているでもあろうようなものを織り込んで解釈することなしに、そうしたのである。…他方、われわれはだからといって、およそ一般的に哲学について言及すること、歴史的事実として哲学について、また事実的な哲学的諸傾向 faktischen philosophischen Richtungen について言及することをさける必要はないし…。」(同書99頁以下。省略は筆者による。)

ハイデガー自身は、1919年/20年冬学期の講義、全集第58巻『現象学の根本諸問題』第二節の見出しに「見地 Standpunkt, 傾向 Richtungen, 現代の哲学の諸体系」という語を掲げ、当時の学的哲学が呈示する「見地, 方向, 体系の像」として、「批判的実在論の月並みの非哲学」(GA58/7)としての新カント派、「まだ根源にまで突き進みはしなかったとはいえ、精神史の新しいアスペクトを開き、とりわけその真正の理念を創出した」(GA58/9)デイルタイ、そしてジンメル、ベルクソン、ジェームズなどに現象学との関連で簡単に触れている。

ハイデガーは、現象学は立脚点や傾向の「いずれでもなく、また、けっしていずれにもなりえない」(027/27f.)と明言する。このことはまたここで問題となる現象学は、師フッサールのそれを踏襲するものでもないことを意味するわけである。いずれにしても、ここではハイデガー独自の「現象学」概念が展開されることになるのであり、初めにも触れたように、既存の現象学を念頭におくと混乱することになる。

・027/28-2027/31 「『現象学』という表現は第一次的には一つの方法概念を意味する。それは、哲学的研究の諸対象が事象を含んでいるものとして何であるかを性格づけるのではなく、それらの諸対象がいかにあるかを性格づける。」

ハイデガーにとっては、現象学が、特定の立場や傾向に属さないものであるとすれば、それは、哲学的研究の対象の特定の事象内実を予め言表するものではなく、まずもってどのような姿勢をとれば、そうした事象に到達できるかの手だて（方法 *methodos* とはもともとある目標に達するための道 *hodos* である）を特色づけるもの、いやそうした姿勢だということのである。

それは問題となる「事象自身から要求されている取り扱い方」（027/21）、問題の事象を扱う学の「原則的な筆法」（027/32）（筆法の原語は「引き出す」という原義の *ducere* の派生語 *Dukutus* である。岩波版では「原則的な骨」）なのである。『存在と時間』以前のハイデガーの表現を用いるなら、生き生きとした「事実的な生の動き」を、脱生化 *Entlebung* したり固定化せずに生き生きとしたままで捉えるのための方策である。それは予め敷かれている道などではなく、事象との緊張関係の中で新たに開拓されなければならない困難な道なのである。

またハイデガーの基礎存在論は、現存在の何であるかという性質を解明しようとするのではなく、現存在がいかにあるのか、その存在意味を明らかにしようとするのであるから、当然その方法は、「諸対象がいかにあるかを（対象に即して適切に…筆者補足）性格づける」ことを役目とするわけである。ハイデガーは1920/21年冬学期の講義、全集第60巻『宗教の現象学入門』の中で、人々があまりに存在者、ものの方に気を取られて、その存在、あり方を見ないことを指摘していた。「事実的な生の経験は、全く内容に専念しており、その如何にということは、せいぜいその中に一緒に入っていくだけである。」（GA60/12）要するに当時の表現を使うなら、現象の内容意味 *Gehaltsinn* ではなく、関係意味 *Bezugssinn*、遂行意味 *Vollzugssinn* の別抉が主目的となるのである。

・027/37-027/38 「「現象学」という名称は一つの格率を言いあらわし、この格率は「事象自身へ！」*Zu den Sachen selbst!* というように定式化されることができる。」（原語挿入は筆者。）

ハイデガーは、1919/20年冬学期の講義、全集第58巻『現象学の根本諸問題』の劈頭では現象学を「生それ自体の根源学」*Urwissenschaft von Leben an sich*

と先告示していたが (Vgl. 「現象学は、根源学そのもの、つまり即かつ対自的な精神の一「即かつ対自における生」の一絶対的根源の学である。…それゆえ現象学は、それ自身が自分の顕現として自分の対象へと、また自分自身へと戻って行くのである。」 (GA58/001) 省略は筆者)、ここ『存在と時間』ではさしあたり現象学は、形式的告示の形で示されて、それは特定の教説、学問内容をさすのではなく、まずもって探究対象に対して取るべき態度、姿勢であり、それは一つの格率 (岩波版では「原則」) だというのである。

格率の原語は Maxime であり、普通「原則、規準、主義、格言、処世訓、箴言」といった意味で使われる言葉である。この語は、『歴史的哲学用語辞典』(HWP Bd.5 参照) によれば、アリストテレスの論理学における最上位の命題に対するポエティウスのラテン語訳 *propositio maxima* に遡るものという。その後他の学問における最高の原理という意味にも使用されるようになり、近代以降、とりわけフランスのモラリストたちの間で実践的-道徳的コンテクストにおける指導的原則、あるいは行為の原則といった意味合いで多用されたという。(例えば、ラ・ロシュフコーの *Réflexions ou sentences et maximes morales*) バウムガルテンはこの語を実践的推論の最上位の命題の意味で用いたが、周知のようにカントはその倫理学において、定言命法の「普遍法則となることを同時に意志しうるような格率にのみ従って行為せよ。」に見られるように、格率を「個人がそれに従って行為する主観的規則」(カント『道徳形而上学原論』A52) の意味で使用した。いずれにしてもハイデガーは、現象学という言葉は、取り扱い原則を表しており、それは先入見や根拠のない構成を斥けて「事象そのものへ迫ること」を命じているものというのである。

「事象」の原語は Sache であり、もともとは古代ゲルマン社会における裁判用語として「係争」や「訴訟」を意味した言葉である。(ちなみに事物を意味する Ding, [英語の thing] も自由民の民会とそこで行われる裁判を意味していた。ハイデガーには『ものへの問い』Die Frage nach Ding という講義、『もの』Ding という講演などがある。) それが中世以降、より広い意味に用いられるようになり、現代では「事柄、事態、用件、本題、核心、テーマ」といった意味

で、さらにはより限定的には「身の回りの道具、所持品、衣類、家財道具」などの意味で使用されている。

ところでこの「事象そのものへ！」であるが、この語句は、例えば岩波版の訳注に「…いうまでもなくフッサール…の現象学の標語であって、一切の先入見をしりぞけ概念構成の立場に反対して、事実そのものをあるがままに記述すべきことが主張される。」(上266頁訳者注)とあるように、現象そのものの明証的な直観へ立ち帰ることを要求するフッサール現象学の基本姿勢を表すモットーと言われている。たしかにそうではあるが、実はフッサール現象学の権威である立松教授によれば(立松弘孝「現象学用語の研究 1」『現象学研究会会報 4』1970年40頁)、フッサール自身もしばしばこうした表現を使っているにせよ、その場合、auf die Sachen selbst という表現が普通であり、しかもそれを主として経験主義者の無反省の事象概念批判に際して使用しており、ハイデガーのように現象学＝「事象そのものへ！」であるといった意味で使用しているわけではない。例えば：

「われわれは、＜単なる言葉＞だけでは…到底満足できないのである。かすかで不明瞭な非本来的直観によってしか…生かされてベレープトいないような意味は、われわれを満足させはしない。われわれは＜事象そのもの＞に立ち帰りたい Wir wollwn auf die Sachen selbst zurückgehen。」(E.フッサール『論理学研究2』邦訳13頁以下。原語の挿入と省略は筆者による。)

「もろもろの事象に関して理性的にもしくは学問的に判断するということは、ところで、事象そのものに準拠するということであり、別言すれば、言説や思いこみを捨てて事象そのものに立ち帰り auf die Sachen selbst zurückgehen, 事象をその自己所与性において問いただし、事象に無縁なすべての先入見を排斥するということにはかならない。」(E.フッサール『イデーン I-I』邦訳102頁。原語の挿入は筆者。)

「経験主義的論証の原理的欠陥は、次の点に存する。すなわち「事象そのもの」への還帰という根本要求 die Grundforderung eines Rückgangs auf die “Sachen selbst” が、経験による一切の認識の基礎づけという要求と、同一視され、も

しくは混同されているということ，これである。」（同103頁。原語の挿入は筆者。）

「スコラ哲学に対する革新的な反動の時期においては，空虚なことばの分析から遠ざかれ。われわれは，事象そのものを問いたださねばならない。Die Sachen selbst müssen wir befragen. 経験に帰れ！直観に帰れ！直観こそが，われわれの言葉に意味を与え，理性的な権利を与えうるのである，という合い言葉が生まれた。まったくそのとおりである！しかしながら，それではいったい事象とは何であるのか。」（E.フッサール『厳密学な学としての哲学』邦訳「世界の名著第51巻126頁。原語の挿入は筆者。）

立松教授は，auf die Sachen selbst よりも Zu den Sachen selbst という表現のほうが一般に通用していることからしても「「事象そのものへ」という呼びかけが現象学の合い言葉として広く人口に膾炙するようになったのは，ハイデガーが「現象学という名称は>Zu den Sachen selbst!<ということばで公式化される一つの原則（Maxime）を表している」…と提言して以来のことである。」（立松弘孝 前掲書40頁）と述べている。（また『現象学事典』186頁の同氏による記述も参照のこと。）ちなみにハイデガーには「「事象に即した」an den Sachen 本当に辛抱強い仕事」（GA58/24）という表現もある。

なおフッサール自身の探究の基本姿勢は，むしろ『イデーン I』第24節で表明されている「一切の諸原理の原理」（「すべての原的に与える働きをする直観こそは，認識の正当性の源泉であること，つまり，われわれに対し「直観」のうちで原的に（いわばその生身のありありとした現実性において）呈示されてくるすべてのものは，それ自身を与えてくるそのままに，しかしまた，それがその際自分自身を与えてくる限界内においてのみ，端的に受け取られなければならない」（邦訳117頁）ということ）に，あるいは「どんな種類のものであれ原的に与える働きをする意識であるかぎりの見るということ」（同書105頁）としての「直接的に見るということ（ギリシャ語でいえば，ノエインということ）」（ibid.），つまり明証性の原理に表明されているといえよう。

・ 028/04-028/08 「しかしこの格率は一ひとは異論をとなえるかもしれない

—あまりにも自明であって、そのうえ、あらゆる学的認識の原理を言いあらわしたものにすぎない、と。ひとは、なぜこの自明性が或る研究を表示する名称として表立って採用されるべきであるのかを、洞察することがないのである。」

対象のあるがままの姿に迫ろうとする姿勢自体は、何も現象学に限ったものではなく、あらゆる誠実な学問の従うべき根本態度であり、そのかぎりでは、ハイデガーは、学問すべてに共通の研究姿勢というまったく陳腐なことを言っているように思われる。しかしこの「あたりまえさ」「自明性」が、つまりは事象に対する先入見が問題だというのである。(「自明性」に関しては、004/29以下でも既に次のように言われていたことを想起せよ。「自明なもの」が、しかもそれのみが、つまり「普通の理性の内密の判断」die geheimen Urteile der gemeinen Vernunft (カント)が、分析論の表立った主題(「哲学者たちの仕事」der Philosophen Geschäft)になるべきであり、あくまでそうであるべきなら、自明さを、哲学的な根本概念の圏域のうちで、それどころか「存在」という概念に関して引き合いにだすのは、疑わしいやり方である。」(原語は筆者挿入。)

なお、このカントからの引用については、「ちくま版」が、『『純粋理性批判』第一版709頁参照。』という注を加えており、また「岩波版」も訳注で、カントの哲学観、哲学者の使命観については『『純粋理性批判』の第二部『先験的方法論』に興味ある叙述がある。』と記しているが、「普通の理性の内密の判断」という言葉自体は『純粋理性批判』の709頁には登場しない。この表現に関しては、フォン・ヘルマン(HPD1, S.50)は、アカデミー版のカント全集15巻所収の「人間学への反省」の中に「哲学者たちの仕事は、規則を与えることにあるのではなく、普通の理性の内密の判断を分析することにある。」(Bd.XV, S180, Reflexion 436)という文を原典として指摘している。

最もおおまかな(形式的一般性における)形式的告示であるかぎり、格率「事象そのものへ!」は、さしあたり事象そのものが何であるかに関しても中立的である。しかし哲学=存在論と考えるハイデガーにとっては、哲学本来の事象そのものの確定こそがまずもって問題なのであり、「事象そのものへ」の要求には、その事象ないし事象領域がどのようなものなのかを特定する問題が

同時に含まれているわけである。(Vgl. 「ひとは現象学の側で—あるいは、自らをそう称する人々のもとで、と言ってもよいが—、真の方法はもっぱら—フッサールがそのことを説得力をもって意識させたように—特定の対象領域とその問題性の根本性格から生まれ出ること」に注意を払わない。… 方法論は問題性から生じるのであり、この問題性は取り扱われるべき対象領域に関する根本の問いの提起の方法である。)(GA58/04) 省略は筆者による。)

しかもその具体化は、とりわけ事象についての先入見、事象理解の自明性の破壊という困難を伴うことが予想されるものなのである。このように「事象そのものへ」という形式的要求が、事象の取り扱い方の吟味、そしてなによりも事象の確保という二重の要求、課題を含んでいることについては、例えば全集第20巻の『時間概念の歴史への序説』の次の箇所を参照。

「この格率が何か自明なものにもかかわらず、浮遊する思想の所持に向かつてははっきりと宣戦布告をしなくてはならなくなったということが、まさしく哲学の現状を特色づけている。今やこの格率が詳しく規定されるべきである。上に表現された形式的な一般性の形では、それはあらゆる学問的認識の原理である。しかしながら、いやしくも哲学が学問的探究であるべきだとしたら、哲学が立ち帰らなければならないものとはどのような事象なのか、—どんな事象自身へなのか—というこそまさに問題なのである。われわれはこの現象学の格率のうちに二重の要求を聴取するが、一つは基盤の上にしっかり立って証示しつつ探究することという意味での事象そのものへという要求（証示する探究の要求）であり、もう一つはフッサールが自身の哲学探究をそう理解していたようにこの基盤をまずもって再び獲得し確実にせよという要求（基盤の露開という要求）である。第二の要求が基礎的なものであり、その中に第一の要求が共に横たわっているのである。」(GA20/104)

「(フッサール現象学の志向性、範疇的直観、ア・プリオリの根源的意味という—筆者注) 三つの発見の事象内容をありありと保持しつつ、われわれ次のように問うことにする：どのような事象がここで捉えられているのか、もしくはこの探究の動向は、どのような事象の把握に向けられているか。それとともに

にわれわれは、現象学の格率の最初の意味（証示する活動という要求）をより詳しく規定できるようになっているのである、つまりこの事象の事象に適した取り扱い方の特色をこの探究そのものの原理の具体化から読み取ることができるようになっているのである。われわれは現象学の理念から演繹をするのではなく、探究を具体化するなかでこの原理を読み取るのである。…今やそれらの発見がどれだけ探究原理の形式的意味に対して内容を与えるのかだけが、つまりどのような事象領野、どのような事象観点、どのような取り扱い方が意味されているのかだけが問題なのである。」（GA20/105）（省略は筆者。）

また、ハイデガーの言う現象学は、はじめから確定、完結したものではありえず、問題の事象との緊張関係、あるいは接近の具体的遂行、哲学的生の自己展開の中で形成されてゆく生の動性の一つ（実存のあり方）であることについては、以下を参照のこと。

「根源学（I）の理念は、この学が、その課題の産出とその最も固有の動機の真の結果によってその「課題」の探求しつつの解明と解決においてまずもっておのれ自身の根源的な理解に達することという意味を自分に与えるのである。…この根源学の理念から生じるのは次のような根本指令である。つまりこの学自身とその生動化 *Verlebendigung* の仕方を抽象化された概念的構成 *Konstruktion* の中で案出しよう *er-denken* とするような、あるいは形式的な配列概念の中で—結果を客観化しながら—それらを静止させようとするような、つまりおのれを根源へのまたその根源からの生き生きとした発現（比喩的な言い回し）への生き生きとした遡行から外に出すようないかなる試みも容赦なく拒絶せよという指令である。換言すれば、それ自身の中で働いている「諸傾向」 *Tendenzen* の真の、具体的な実現と遂行（実施）だけが、その学自身とその学にも最も固有の問題領域に通じるのである。…そのような学として、この学はおのれの根源学的な問題性と方法論を外部から、この学とは異質な何かから、つまりは個別科学から押しつけてはならないのであり、そうではなくそれは根源から、つまり根源的な産出と絶えず更新される実証と明証的な傾向の充実 *Tendenzerfüllung* における根源から生じなければならないのである。」（GA58/

02f.) (省略は筆者。)

また事象の自明性に関しては、フッサールの次のような発言も参照のこと。

「全く無造作に経験主義者によれば、認識されうる「事象」の範囲は分かり易い具合にも自然主義的に制限されているから、通常の意味での経験が、事象そのものを与えてくれる唯一の作用と見なされることになる。けれども事象とは、そのまま即座に、自然事象であるのではなく、通常の意味での現実が、そのまま無造作に、現実一般であるのでもない。そして実は、ただ自然現実だけに関係するものが、われわれが通常近世的学問において経験と呼んでいるあの原的に与える働きをする作用にほかならないのである。こうした場面での両者の同一視を行なってその同一視こそ自明なことだと思いこんで処置するということは、この上なく明瞭な洞察において与えられるべき区別をよく吟味もせず脇に押しのけるということにほかならない。」(『イデーン I-I』邦訳103頁)

いずれにしてもハイデガーの「現象学＝事象そのものへ」は、のちに明確になるように、あらゆる「立場性」の否定なのではなく、むしろまさに彼の立場性の表明なのである。われわれが存在の先理解を既に前提していることについて、ハイデガーは随所で述べているのだが(たとえば前提に関してすでに「注解(1)」において指摘したように、GA61/157以下、GA56/57/77以下などを参照のこと)、ここでは、全集第17巻の次のような発言が参考となろう。「哲学における無前提性ということ。それに対して三つの前提：真正で正しく問うことの情熱。情熱は好きなようにやってくるのではない。情熱はその時宜とテンポとをもっている。現にその準備があるのでなければならない。その準備とは次のようなことである。1. 本能的に確かな先入見の優越への心配り *Bekümmern*; 2. 特定の学問に通じることへの気遣い *Sorge*; 3. 生は認識する問いに対して心的な落ち着き、いわゆる理論的考察とはまったく異なったものを得させてくれるということへの覚悟。

1に関して。先入見がないことではない、無先入見とはユートピアである。いかなる先入見も持たないという考えは、それ自身が最大の先入見である。或ることが先入見であることが明らかになるというあらゆる可能性に対する優越。

先入見から自由なことではなく、決定的な瞬間に事象との対決を通して先入見を放棄するという可能性に対して自由であること。これが学問的人間の実存形式なのである。」（GA17/02）

・028/12-028/21 「現象学、すなわちフェノメノロジーという言葉は、現象、すなわちフェノメーンと、学、すなわちロゴスという二つの構成要素をもって。これら両者は、ファイノメノンとロゴスというギリシャ語の二つの術語へとさかのぼる。…現象学の予備概念 *Vorbegriff* は、「現象」と「学」という名称の両構成要素でもって指さされている当のものを性格づけることによって、また、これら両者から合成された名称の意味を確定することによって明らかにされるべきである。」（原語の挿入および省略は筆者。）

ここで現象学は、現象と学という二つの構成要素に分けられて具体化されていくのであるが、「現象」の解明が「事象そのものへ」の格率もつ二つの要求のうちの第二の要求に、また「学」の解明が第一の要求に対応しているわけである。（Vgl. 「*logie*—何々の学—は、その主題となる事象に応じてその都度性格をことにするのであり、論理的、形式的には未規定であり、目下の場合、現象が意味するものから規定を受けるのである。」（GA20/110f.））なお全集第20巻の講義『時間概念の歴史への序説』での対応箇所（第9節）の見出しは、はっきり「その名称の構成要素がもつ根源的な意味の明確化」とある。

なるほど現象学の概念ではなく、その「予備概念」とうたってはいるものの、ここでわれわれはいささか首を傾げたくなる。なぜ突然ギリシャ語の語源（ないしハイデガーがそう考える古代ギリシャ人の経験）に戻らなければならないのか。「現象」、あるいは「学」の古い意味がかくかくしかじかのものであったことが明らかにされたとしても、それが即、現在の現象学の意味であるということにはならないのではないのか。もし現象学の内容の具体化が、ギリシャ語の意味するものに遡らなければ為されないのだとすれば、同様に、ここで例示されている神学、生物学、社会学も、テオス、ビオス、コイノーニア等に遡らなければ、その意味が明らかにならないことになりはしないか。あるいは、伝統的存在論（とその語彙）の解体を意図するハイデガーにとっては、現象とい

う言葉も、学という言葉も哲学の伝統の中で歪曲されてきたのであり、そうした歪曲による自明性を打破するためにも、まずもって近代以前の哲学、近代語ではなくとりわけギリシャに遡って原義を確認することは必須のことかもしれないが、しかしそこで確認された意味がそのまま現代の学問概念に適用できるかどうかは別問題であろう。(なおギリシャ思想に特別の価値を置くハイデガーにとって、ギリシャ思想の担い手としてのギリシャ語は別格のものであり、とりわけ哲学用語のラテン語訳がその後の厄災のもとであるかのような発言も一度ならず見受けられるのである。例えば後期の思想に属するものであるが、以下のような発言。「こうしたギリシャ語の名辞のラテン語への置き入れは、今日でもなおそのように見なされるような差し障りのない出来事では決してなかったのである。むしろ見たところ逐語的でそれゆえに意味を保っているように見える翻訳の背後には、ギリシャ人の経験を異なった思考の仕方へと翻訳することが隠れているのである。ローマ人の思考は、ギリシャの諸単語 *Wörter* を、彼らが述べていることに対応する同じように根源的な経験なしに、つまりギリシャの言霊 *Worte* なしに受け継いでいるのである。西洋の思想の底なし状態は、この翻訳から始まるのである。」『芸術作品の根源』Reclam 版 S.15)

こうした手法は、後期のように明確にはないにしても、ギリシャの発端に哲学の偉大さを見、それ以降の展開を存在忘却の歴史と見なすハイデガーの偏見、先入見(?)に基づくと思えないこともない。もちろん、初期フライブルク時代に始まる生の哲学的観点からのアリストテレス哲学との真剣な対決の成果による確信が、こうしたアプローチの仕方を正当化するわけであろうが、この箇所では、とくに詳しくアリストテレス論が展開されているわけではなく(全集第17巻の対応箇所でははっきりと「アリストテレスへ遡っての「現象学」という表現の解明」(第一部第一章の表題)となっているのだが)、ここでは、「現象」、あるいは「学」という「事象そのもの」の事象に即した考察よりも、むしろ非現象学的、スコラ的な言葉の考察が行われ、あたかも中世神学が、「かのスタギーラ人曰く…」を多用したように(特にロゴスの概念の取り扱いにおいて)アリストテレスが権威として持ち出され、ハイデガーが先理解して

いる現象学概念が古代ギリシャの原義に逆投射されて、手品の鳩のように取りだされていくような、印象を受けざるをえないのは筆者だけなのだろうか。そうした印象が誤解であるかどうかの解明には、ハイデガーのアリストテレス解釈の検討だけではなく、アリストテレスの哲学自体との対決が必須と思われるが、残念ながら、そうしたことは筆者の能力外のことである。

・028/21-028/23 「ヴォルフ学派において成立したと思われる現象学というこの語自身の歴史は、ここでは重要ではない。」

「この語自身の歴史」に関しては、全集第17巻の第一章の冒頭で簡単ではあるが以下のような言及がなされている。

「「現象学」という表現は、18世紀にはじめてクリスティアン・ヴォルフの学派において、すなわちランベルトの『新機関』の中で、当時好まれた *Dianoilogie*, *Alethiologie* といった類似した造語表現と関連して登場し、仮象の理論、仮象を回避するための理論を意味している。カントにも似通った概念が見られる。ヨーハン・ハインリッヒ・ランベルト宛てのある手紙に、彼は以下のようにしたためている：「その中で感性の諸原理に対してそれらの妥当性と限界が規定されうような、単に消極的であるにしても全く特殊な学問、一般的現象学（*phaenomenologia generalis*）が形而上学に先立たなければならないように思われる。」のちに「現象学」はヘーゲルの主著の表題となる。19世紀のプロテスタント神学では：諸宗教の様々な現象様式についての学問としての諸宗教の現象学。「現象学」という語は、形而上学についてのフランツ・ブレンターノの講義でも使われている（フッサールの口伝てによる）。なぜフッサールはこの表現を選んだのだろうか。…」（GA17/05f.）

ライプニッツの推挙でハレ大学の教授となり講義をドイツ語で行ったことや哲学の術語のドイツ語化を図ったことでも知られる Chr. ヴォルフ（1679～1754）を中心に18世紀前半に形成されたのが、ドイツ啓蒙哲学を代表するヴォルフ学派であるが、現象学という言葉は、上の引用にあるように、そのヴォルフ学派に属する J.H.ランベルト（1728～1777）が、主著、『新機関、すなわち真なるものの究明と表示、ならびに真なるものを誤謬と仮象とから区

別することに関する考察』(1764)において使用したのを嚆矢とする。彼の現象学は、仮象(真なるものと偽なるものとの中間物)の理論とも呼ばれ、さらにまた仮象は基本的には視覚に由来するために、この理論はまた「超越的光学」とも呼ばれたという。(詳しくは『現象学事典』弘文堂1994年の渡邊二郎教授執筆の「ドイツ観念論と現象学」の項目、あるいは『講座現象学1—現象学の成立展開』弘文堂1980年の木田元教授執筆の「現象学とは何か」の「1「現象学」という言葉の歴史」(2頁以下)を参照のこと。)

ギリシャ人の経験に遡って(とりわけアリストテレス解釈に依拠して)「事象そのものへ」という格率としての現象学の詳しい概念規定ないし具体化を進めるハイデガーにとって、近代に始まる教説としての現象学の歴史は、とりわけその語義の変遷といったことは、重要にはあらずというわけであるが、しかし実はハイデガーの現象学は、デカルトに発する近代以降の意識の哲学、とりわけフッサールの現象学との真摯で仮借のない対決の中で彫琢されていったのであり、語義としてではなく、事象としての現象学の歴史、あるいはそれまでの現象学が何を本来の「事象」と捉えてきたかの理解は、ハイデガーの現象学を理解するためにも必要なことである。

なお『存在と時間』以前の講義では、第17巻以外にもたとえば第58巻の第三節「「現象学」という言葉の使用の歴史的体系的諸アспект」(GA58/11f.)や第20巻の「準備的部分」の「第一部 現象学的研究の成立と最初の突破」(GA20/13~20/33)、第63巻1923年夏学期の『存在論』第14節「「現象学」の歴史に関して」(GA63/67f.) (主としてブレンターノとフッサールについて)などが現象学の流れについて、まとまった形で言及している。

例えば第58巻第三節「「現象学」という言葉の使用の歴史的体系的諸アспект」を見てみると、そこではおおよそ次のようなことが述べられている。まずヘーゲルの『精神の現象学』への言及がなされ、その後、この言葉がプロテスタント神学において宗教的意識の記述という意味で使われるようになること、1900年にはプフェンダーが『意欲の現象学』で用いたこと、リップスも心的出来事の記述の意味で「現象学的」という用語を使用したこと、さらにフッサー

ルが『論理学研究』第二巻の副題を「現象学と認識の理論のための研究」としたことが紹介されている。ハイデガーは、フッサールの著作では『論理学研究』だけを高く評価するのだが、この講義でも「この著作は、近年の真摯な哲学的に学的な文献において匹敵するものがないほど影響を与えたものであるが、それは最初の「突破」Durchbruchだったのであり、そのようなものとして最初の猛烈さをもっていわばはっきりとは消え去っていなかった古い思考の習慣の残滓を引きさらったのである。」（GA58/13）と賞讃するのだが、しかし「フッサール自身が直接このすべての将来の学的哲学の根本書の刊行の後、彼自身の発見について、つまりその十分な意味とその射程全体について完全に反省的に自覚していなかった」（ibid.）ために、「フッサールは、第二巻の序論で現象学的方法を記述的な方法として、しかも発生的・説明的心理学に対する記述的心理学と特色づけたということが起こった」（ibid.）という。フッサールはその後間違った特色づけに気がついたのだが、「それにもかかわらず、その後この著作には一連の重大な誤解が結びついたのであり、今日またその真正の諸傾向はほとんど理解されない」（GA58/15）という。その後の動きについては、ハイデガーは、『論理学研究』第一巻の心理学主義の徹底的批判に目を奪われた人々は、本来的に刺戟を与えている超越論的動機を全く見落として、「心理学主義の輝かしい批判者自身が再び心理学主義に陥ってしまったというコメントでもって、フッサールを片付けた」（GA58/17）と総括している。その後フッサールが1910年には『厳密な学としての哲学』で現象学的哲学の諸傾向の原理的な叙述を行い、学的な体系的統一をめざしたが、1913年には『哲学と現象学的探求のための年報』において一つの研究共同体を形成し『イデーン I』を表したこと、ミュンヘン学派は、この書物を「特殊研究」としてしか受け取らなかったこと、現象学内部にこうした原理的な緊張があり、その解消は重要であることなどを述べたうえで、ハイデガーは現象学の現状を「現象学の理念の醜形化 Verunstaltungen」（GA58/17）と呼び、「非真正の平均化と曖昧化をはねつけるような現実的な学的生の真正の着手」（ibid.）の必要性をうたっている。またこの箇所の内容は第20巻13頁以下で、より詳しく扱われることになるので

ある。

なお第58巻では、現象学の理念の醜形化に関しては続く第4節が詳しく扱っているのだが、そこではフッサールの名前は出てこない。しかし例えば第17巻48節は「デカルトに由来する確実性への関心 Sorge による現象学的所見のフッサールによる醜形化」と題され、はっきりとフッサールが名指しされているのである。(ハイデガーのフッサール現象学批判については、原書38頁のフッサールへの言及の注解に際して詳しく扱うこととなる。)

* * *

『存在と時間』の一頁半ほどに、これだけの紙数を費す冗長な注解だったため、肝心の「A現象という概念」「Bロゴスという概念」「C現象学の予備概念」については、次回に考察することとしたい。 (続く)